❶ 裁判所書記官の仕事

中学生保護者

裁判所とは、どんなところでしょうか。

裁判所は、国民の負託（責任を持たせて任せること）を受けて司法権を行使する唯一の国家機関であり、その役割は、具体的事件の適正・妥当な解決を通じて、国民の権利を擁護し、法秩序を維持することにあります。そのために、裁判官を始め、裁判所書記官，家庭裁判所調査官、裁判所事務官、裁判所速記官等裁判所ではさまざまな職種の人が働いていますが、その中で今回は裁判所書記官の仕事をご紹介したいと思います。

よくニュース等で法廷のシーンを見たことがある人は多いと思いますが、法壇の上に座って黒い服を着ている人が裁判官であり、裁判官は判決という形で具体的事件の判断を示す人、裁判所書記官は法壇の下に座って黒い服を着て具体的事件の手続内容を書面化して作成する人です。このように、裁判所書記官の仕事はまず裁判に立ち会い、裁判で行われた手続を調書という書類にして作成することにあります。ですから、裁判所書記官は法廷内で裁判官とともに必ず座っています。先ほど裁判所の役割は「具体的事件の適正・妥当な解決」をすることといいましたが、これは、裁判官の判断は訴えの提起から判決に至るまで全て法律、規則にのっとった裁判手続により行われている、ということが前提になります。裁判手続の適正は、手続の公開によって担保されるのが原則ですが、手続の公開が制度面で確保されたとしても国民が知ることができる手続の範囲は事実上限られています。そこで、手続の公開による適正手続の担保機能を補助するため、事件に関する記録の作成が求められ、そのために作成される調書は、法律、規則上裁判所書記官のみに作成権限が与えられているのです。

次に、コート（法廷）マネージャーとしての仕事があります。せっかく裁判が開かれても、裁判の当事者が裁判に向けて準備ができていなければ非効率な時間がかかる裁判になりますよね。こういったことを避けるため、迅速、適正な裁判を行うため、裁判所書記官は裁判が行われる前に、裁判の当事者がきちんと事前準備をしているか確認し、できていなければ準備を促すことになります。こういったことを各裁判の前に行い、充実した裁判が行われるように努めています。

裁判所の裁判部門は、民事部、刑事部、家事部、少年部に分かれますが、私は現在刑事部に属しています。刑事部の特徴として、ニュースになるような大きな事件が多いことがあげられます。私も、何度か裁判所書記官として法廷に立ち会っている様子がテレビのニュースに映ったことがありますが、元気に仕事をしている姿を家族に見せることができて、家族孝行が少しはできたかなと思っています。外部講師的なこともします。裁判員制度が導入される前に企業や団体に出向き、制度の説明を行ったり、家事部のときは司法書士会等から依頼されて成年後見制度について説明をしたり、少年部のときは高校の生活指導担当の先生方数十人の前で少年事件の審判手続について説明をしたこともあります。

裁判所書記官になるには、まず裁判所の一般職員（裁判所事務官）にならないといけません。裁判所職員採用試験に合格して裁判所事務官に採用後、裁判所職員を対象とした裁判所職員総合研修所裁判所書記官養成課程入所試験に合格して所定のカリキュラムを履修し卒業することにより資格が付与されます。裁判所書記官はその仕事上、法律専門職になりますが、決して大学法学部卒ばかりではなく、上記の裁判所書記官養成課程入所試験は大学法学部、法科大学院卒を対象した第一部、それ以外を対象とした第二部があり、法学部以外でも多数裁判所書記官として活躍しています。

また、近年、裁判所職員となるのは女性の方の比率が高いです。それは産前産後休暇、育児休暇、育児短時間勤務等の制度がしっかりしており働きやすい環境整備ができているからだと思います。育児休暇は男性職員もよく取得しています。出産、育児が原因で辞める人はほとんどいません。裁判所は男女平等で、採用試験の種類（総合職、一般職）にもとらわれることなく、成績主義、能力主義に基づく人事管理が徹底されています。

裁判所は、人権保障の最後のとりでとも言われています。そして法律は毎年追加、変更、削除があり、常に勉強が必要で大変ではありますが、このような裁判所で働き、よりよい司法サービスを国民に提供していく一員として裁判所書記官の仕事はとてもやりがいのある仕事だと思っています。

この拙文が、少しでも皆さまの興味を持つきっかけとなり、何らかのお役に立てればうれしく思います。

❷ 医療を目指す皆さんに伝えたいこと

元高校生保護者

清教学園の生徒の皆さんへ

さて、ここ数年医療系ブームが続いており、皆さんの中にもご自身が医療系を目指している方がいらっしゃるのではないでしょうか。医療スタッフになってほしいと思うような有望な若者も多数いるなかで、残念ながら自分勝手な解釈による自己利益しか頭にない人がいます。

生徒さんの中には、成績で医療系学部学科を目指し、どの大学を受けるかも偏差値で決める方がいらっしゃると思います。日本の入試制度や進学指導が長年にわたってそのような方向で大学生をつくってきたことが大きな原因となっています。本来は、A先生の授業を受けたいとか、こういうことがやりたいからB大学にするといった選び方をすべきではないでしょうか。

これは、２００２年４月16日付の朝日新聞の「私の視点」に「医学生へ　医学を選んだ君へ問う」というタイトルで掲載された金沢大学名誉教授の河崎一夫先生の文章の一節です。少し長いので、一部を紹介します。

医師を目指す君にまず問う。高校時代にどの教科が好きだったか？ 物理学に魅せられたかもしれない。高校時代に物理学または英語が大好きだったら、なぜ理学部物理学科や文学部英文学科に進学しなかったのか？ 物理学に魅せられたのなら、物理学科での授業は面白いに違いない。

次に君に問う。人前で堂々と医学を選んだ理由を言えるか？ 万一「将来、経済的に社会的に恵まれそう」以外の本音の理由が想起できないなら、君はダンテの「神曲」を読破せねばならない。それが出来ないなら早々に転学すべきである。

さらに問う。奉仕と犠牲の精神はあるか？ 医師の仕事はテレビドラマのような格好のいいものではない。重症患者のために連夜の泊まりこみ、急患のため休日の予定の突然お取り消しなど日常茶飯事だ。死にいたる病に泣く患者の心に君は添えるか？

君に強く求める。医師の知識不足は許されない。知識不足のまま医師になると、罪のない患者を死なす。知らない病名の診断は不可能だ。知らない治療を出来るはずがない。そして自責の念がないままに「あらゆる手を尽くしましたが、残念でした」と言って恥じない。

こんな医師になりたくないなら、「よく学び、よく遊び」は許されない。医学生は「よく学び、よく学び」しかないと覚悟せねばならない。

医師を目指す医学生へ向けて書かれたものですが、私はいつもこの記事を見るたびに、身が引き締まる思いがします。世の為・人の為・社会の為に働くというのは、これは社会の皆さんが思うところです。

数年前、２０年以上勝利を得ることができなかった日本のラグビーチームが、ワールドカップで番狂わせとも思われる南アフリカから劇的な勝利しました。その結果もさることながら、スタッフ一丸の練習が評価されていました。更に過日の日本大会ではトップ８の偉業を刻みました。藤井雄一郎強化委員長は「次はフランス大会。もう一つ上を狙えるようにチャレンジしていきたい。」との抱負を語っていらっしゃいました。

医療の世界も一部の自己利益だけを追求する者が存在するうちは駄目なのでしょう。各人が世界をリードする業績を賞賛し、さらなる成果を期待するようになって初めて良き事が増えるのではないでしょうか。

中には自分に自信が持てない人もいると思います。是非とも、嫌いなことにも取り組んでください。やると決めたら自然体ですぐにやることが大切です。〝これならできる〟というところから入って〝これなら負けない〟というものに変われば準備万端になるはずです。ぜひ試してください。

大学はゴールでもスタートでもありません。そこから更に研鑽を積んで下さい。河崎先生が愚生に「君！道半ばにして、なお険し、一層奮励努力せよ。」と叱咤なさっていると思う今日この頃。

皆さんの御多幸をお祈りいたします。